様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００４３６

研究課題名（和文）英国小説における〈女性のゴシック〉の継承と展開

研究課題名（英文）The Tradition of "Female Gothic" in English Novels

研究代表者
木村　晶子（KIMURA, Akiko）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：７０２６７４５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：海外での研究が盛んであるにもかかわらず、国内での認知度の低い〈女性のゴシック〉の視点から、18世紀末から21世紀に渡るイギリス女性作家研究を行うという研究計画を、ヴィクトリア朝の時点までは進めることができた。これまで英文学のキヤノンからは排除されてきた〈女性のゴシック〉の原点とされるアン・ラドクリフが単なる恐怖小説の作家ではなく、その後の英国小説に大きな影響を与えたことを示した。また、ヴィクトリア朝のブロンテ姉妹、エリザベス・ギャスケル、ジョージ・エリオットの作品を〈女性のゴシック〉の観点から新たに分析することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学術的成果としては、複数の国内学会（日本ブロンテ協会、日本ジェイン・オースティン協会、日本ジョージ・エリオット協会）における〈女性のゴシック〉の観点からのシンポジウム発表により、単なる恐怖小説を超えたゴシック文学の新たな意義と共に、国内研究の少ないこのテーマについてより多くの研究者に知っていただくことができた。
社会的意義としては、2022年のNHK　BSで企画段階から関らせていただいた『ダークサイド・ミステリー』のメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』の番組出演によって、一般の方々にも原作を広く知っていただくことができた。

研究成果の概要（英文）：While the criticism on the novels of "Female Gothic" has been successively published for these years, this theme is not well-known in domestic English studies, and the research on Ann Radcliffe who is supposed to be the pioneer of "Female Gothic" has been scarce. I examined the significance of Radcliffe as the source of the following tradition of British novels and add a new perspective on the study on Victorian female novelists such as Elizabeth Gaskell, Bronte sisters and George Eliot. I could expand the field of feminist criticism by focusing on the women's metaphorical predicaments and liberations since the latter part of the eighteenth century till the Victorian period.

研究分野：英文学

キーワード：女性のゴシック　ゴシック小説　アン・ラドクリフ　ヴィクトリア朝女性作家　メアリー・シェリー　エリザベス・ギャスケル　ジョージ・エリオット　ブロンテ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

代表者　部局　　教育・総合科学学術院
　　職　　教授
　　氏名　　木村　晶子

〈研究種目名〉　2018 年度 基盤研究(C)　　２．課題番号　　18K00436

〈研究課題名〉　英国小説における〈女性のゴシック〉の継承と展開

〈研究期間〉　平成 30　年度～令和　4　年度　　５．領域番号・区分 02030

１．研究開始当初の背景

欧米では、1990 年代以降、ゴシック文学が再評価され、それと共にフェミニズム批評から発展した <女性のゴシック>に関する 研究が多角的視点で展開されてきた。その研究が 21 世紀においてますます重要性を増しているのにひきかえ、日本ではこの分野に特化した研究はほとんど見られない。ゴシック文学に関しては、近年、国内において優れた研究書や邦訳が継続的に出ているが、知る限りでは<女性のゴシック> に特化した研究書はまだない。

これまで、Jane Austen, Mary Shelley などの 19 世紀初頭の作家の他、Elizabeth Gaskell、Charlotte Brontë, Emily Brontë, Anne Brontë などのヴィクトリア朝女性作家を研究してきた。特に Mary Shelley に関しては、編著『メアリー・シェリー研究』を 2009 年に出版し、『フランケンシュタイン』の作家・シェリーの妻としてだけでなく、19 世紀の英国小説における重要な作家としての全体像を示した。その後、Charles Dickens, George Gissing などの作品研究によって、19 世紀英国小説に関するより広い視野をもつことができた。そうした研究を経て、従来の日本の英国女性作家研究に新たな視点を加え、併せて自らの女性作家研究に〈女性のゴシック〉の視点を通して、18 世紀から 20 世紀へと続く歴史的視座を加えたいと思った。

２．研究の目的

Victorian Gothic とされる男性作家の作品批評は多いが、本研究で扱う 19 世紀女性作家に関しては、この視点からの批評は少ない。国内の英文学研究、特に女性作家の作品研究に〈女性のゴシック〉からの視座を提供したい。

また、Jean Rhys, Angela Carter、Susan Hill、Sarah Waters ら、20 世紀および現代の女性作家研究をも含めることで、Ann Radcliffe 以来、18 世紀末から現代にまで続く、男性のゴシック文学とは異なる系譜を見出したい。

また、<女性のゴシック>の非日常的世界のもつ越境性の魅力は、現代のサブカルチャーに至るまで見出せる。学術論文による学問的貢献と共に、例えば『フランケンシュタイン』のアダプテーションなどのサブカルチャーとしての〈ゴシック〉に魅力を感じている一般の方々にも英文学の面白さを伝えるという社会的意義をもつ研究としたい。

３．研究の方法

①（18 世紀末）〈女性のゴシック〉の原点とされる Ann Radcliffe の作品研究を行う。特に、代表作の *The Mysteries of Udolpho* を中心に、18 世紀における感受性の主題を考察する。

②（19 世紀前半）ロマン主義への傾倒と反発という視点から Mary Shelley の *Frankenstein* と後期の小説との関係性を見出す。

③（ヴィクトリア時代）Ann Radcliffe のロマン主義的崇高さへの憧れと過剰な感受性の抑制という初期<女性のゴシック> の特色がヴィクトリア朝女性作家にどのように継承され、変化するかを検証する。ヴィクトリア朝リアリズム文学に潜むロマン主義的衝動とその抑制を捉え、新たな視点から Elizabeth Gaskell のゴシック的短編と長編、Charlotte Brontë，Anne Brontë, George Eliot の作品研究を行う。

４．研究成果

最終年度は、日本ジェイン・オースティン協会大会で日本ジョージ・エリオット協会との合同シンポジウムが企画され、アン・ラドクリフに関するテーマで登壇依頼を受けた。改めて〈女性のゴシック〉の原点となるラドクリフの研究を行いつつ、ヴィクトリア朝女性作家への影響を考察した。これまで研究できなかったジョージ・エリオットのリアリズム小説における〈女性のゴシック〉に通じる主題やモチーフなどを見出すことができた他、エリオットのゴシック的中編 The Lifted Veil に関する分析も行うことができた。これによって、本研究の 19 世紀までの段階を、かなりまとめることができた。

また、2021 年の日本ブロンテ協会のアン・ブロンテに関するシンポジウムで発表した内容を発展させて登壇者４名でアン・ブロンテに関する研究書を出版することとなった。2022 年にはその執筆を行って原稿を提出済であり、現在、大阪教育図書より出版準備中である。(2023 年度内に出版予定)

本研究ではコロナ禍となり、意図していた海外での発表は見送らざるをえなくなった他、オンライン授業対応、介護負担、自身の健康問題などが生じてしまい、当初の予定を完全には遂行することができなかった。特に 20 世紀以降の女性作家研究を十分に進められていない。

ただ成果としては、複数の学会（日本ブロンテ協会、日本ジェイン・オースティン協会、日本ジョージ・エリオット協会）で、〈女性のゴシック〉の観点からのシンポジウム発表をさせていただき、日本での研究の少ないこのテーマについてより多くの研究者に知っていただけたことが有意義だったと思う。

また、2022 年の NHK　BS で、企画・制作の段階から関わらせていただいたメアリ・シェリーのゴシック小説としての『フランケンシュタイン』の番組出演によって、単なる怪物物語ではないこの作品の深さと意味や作者の人生を広く知っていただけたのも社会的意義のある成果と言える。

今後はさらに 20 世紀以降の作家の研究も進めて、これまでの研究成果をまとめるべく準備中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 木村晶子	４．巻 1036号
２．論文標題 〈女性のゴシック〉	５．発行年 2021年
３．雑誌名 早稲田文学	６．最初と最後の頁 318 - 325
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村晶子	４．巻 第68号
２．論文標題 アン・ラドクリフ『ユドルフォの謎』における〈感受性〉の教育	５．発行年 2020年
３．雑誌名 学術研究（早稲田大学教育・総合科学学術院）	６．最初と最後の頁 151-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 木村晶子	４．巻 第17号
２．論文標題 アン・ラドクリフと娘たち―ヴィクトリア朝女性作家と〈女性のゴシック〉	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ジェイン・オースティン研究（日本オースティン協会）	６．最初と最後の頁 53-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 木村晶子
２．発表標題 『ワイルドフェル・ホールの住人』における〈女性のゴシック〉
３．学会等名 日本ブロンテ協会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 木村晶子
２．発表標題 アン・ラドクリフの『ユドルフォ城の怪奇』とヴィクトリア朝女性作家
３．学会等名 日本オースティン協会・日本ジョージ・エリオット協会（合同大会）（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計5件

１．著者名 松岡光治　編	４．発行年 2020年
２．出版社 Athena Press	５．総ページ数 367
３．書名 Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays	

１．著者名 惣谷美智子・岩上はる子編	４．発行年 2019年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 428
３．書名 めぐりあうテクストたち：ブロンテ文学の遺産と影響	

１．著者名 松岡光治　編	４．発行年 2018年
２．出版社 大阪教育図書	５．総ページ数 298
３．書名 ディケンズとギッシング―底流をなすものと似て非なるもの	

１．著者名 日本ギャスケル協会	４．発行年 2018年
２．出版社 大阪教育図書	５．総ページ数 288
３．書名 比較で照らすギャスケル文学	

１．著者名 大田美和　渡千鶴子　侘美真理　木村晶子	４．発行年 2023年
２．出版社 大阪教育図書	５．総ページ数 -
３．書名 アン・ブロンテ（仮題）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

・（テレビ番組）NHK BS　ダークサイドミステリー　「フランケンシュタイン」誕生 “ 19歳の母 ” が生んだ無限の魅力（初回放送2022年4月、再放送2023年6月）：企画協力、出演

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関